

大学において教育や学修を支援するということ

— 個別的な実践から専門職能の理解へ —

竹 内 比 呂 也

(千葉大学)

〔キーワード：大学，教育・学習支援，大学職員，職員の専門性〕

はじめに

アクティブラーニングを支えるために必要なものの中には、筆者に先立って報告された中井氏が指摘された通り、組織的な対応が求められるものがある。その中に教育支援や学習環境が含まれる。本稿は、学習環境に焦点を当て、千葉大学が展開してきたアカデミック・リンクについて、またその経験を踏まえて展開している教育・学修支援専門職養成プログラム（ALPSプログラム）についての実践について報告する。本シンポジウムにおける他の報告が理論的な側面に焦点を当てたものであるのに対して本報告は泥臭い経験を踏まえているので、他とはいささかレベルが違う点についてご了解いただきたい。

1. 教育・学修支援に関する議論の背景

高等教育における教育環境の改善や教育の質の向上、質的転換といった点については、これまで様々な議論があった。特にいわゆる「学士力答申」（中央教育審議会、2008）以降それが顕著になっている。学習の質の向上のみならず、キャリア教育の重要性、グローバル化、地域創生と連結したCOCプログラム、アクティブラーニング、情報通信技術を活用した反転授業といった、ある種のキーワードが出てきた。先ほど中井氏の報告の中にあつた教授法に関しては議論が相当進展した印象を持っているが、教育・学習環境整備についての議論は必ずしも進んでいなかったように思われる。

このように教育・学習環境改善の必要性についての議論は比較的新しいものであるが、そのような議論の中で、千葉大学は、大学図書館を教育あるいは学習環境という文脈で捉えてどのような機能を備えることでその役割を最大限発揮できるだろうかをいち早く考えてきた。2011年度から展開しているアカデミック・リンクというコンセプトの下での活動はその具現化である。我々にとっては、その実践の中で教育・学習支援を行う職員の

専門性という課題が徐々に見えてきたわけであるが、このような実践のみならず、国の政策文書あるいは社会における大学教育に関する議論においても、教育・学習支援の必要性については徐々に認識されていたように思われる。

2012年の中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」（中央教育審議会、2012）においては、教育の質の向上が強く訴えられているが、学習成果の向上、学習時間の増加、三つのポリシーに基づいた組織的な教育課程編成の重要性といったようなことが述べられており、また大学教育の現代の特徴と社会的、政策的な養成を背景として、効果的な教育の実現に向けた支援の必要性、個々の学生に応じた学修支援の必要性といったようなことが論じられてきた。さらには、今日の情報技術環境の変化は、教育・学修環境にも大きな変化をもたらしている。このような状況の変化は教育・学修支援の専門性の必要性のみならず、大学における高度専門職の必要性という議論も導き出している（篠田、2016）。これまでの大学における高度専門職に関する議論は、大学経営にかかる専門性の必要という議論であった。しかしながら、最近の議論は必ずしもこの領域に限定されるものではなく、まさに教育・学修を支援する人材の専門性といった点も含めて議論されるようになってきている。

千葉大学アカデミック・リンク・センターが提案するALPSプログラム（アカデミック・リンク教育・学修支援専門職養成プログラム）は、専門職養成を謳い文句にしている。しかし、我々の提案以降、シンポジウムやラウンドテーブルなどで意見交換の機会を積極的に持ち、専門職と言い切ってしまうことの難しさについて、いろいろ意見をいただいていた。このことを踏まえ、以下においては、教育・学修支援専門職というよりも教育・学修支援に関わる「専門職能」あるいは「専門性」ということで議論したい。

2. 教育・学修支援の実際

学修支援の実際について、文部科学省の資料をベース

に説明したい。文部科学省実施した委託調査「大学における専門的職員の活用実態把握に関する調査」(2015)において、大学における専門的職員の配置状況が示されている。その一つに学修支援が取り上げられている。情報通信・IT支援、就職・キャリア形成支援といった領域において実施割合が高いことが見えてくる。学修支援についても、もはや低調という状況ではなく、全体の平均では25.5%であり、国立が若干高く、公立が若干低いといった状況になっている。

3. 千葉大学における教育・学修支援の考え方

我々はこのように学修支援に関わる専門的職員が四分の一の大学で配置されているという事実を見て、教育・学修支援の専門性の重要性を考えたわけではない。先に言及したように、千葉大学アカデミック・リンクでは図書館機能を高等教育における教育・学修支援という文脈でどのように生かすことができるか、あるいは図書館の持っている潜在的な能力、可能性を教育・学修支援の文脈の中でどのように生かすことができるかということを考えて2011年度から実践を始めていた。アカデミック・リンクを構成する主要な要素として、人的支援の重要性はそのコンセプト形成時より認識されていた。その後のアカデミック・リンクの実践において、人的支援の重要性については何ら疑問を持つことはなかったし、人的支援を行うことの是非については全く議論にならなかった。しかし、人的支援を誰が行うのかということは議論が必要な課題である。大学の中には教員もいるし職員もいる。あるいは、ピアサポート、すなわち学生自身による学生の支援の可能性については既に議論がなされていた。教員、職員、学生という潜在的な人的支援のリソースを全て有効に活用していくにはどうしたらいいかということについて考える必要があった。ただし、そのための理論的枠組みがあったわけでは決してなく、探索的に試行錯誤を重ねながら考えていかざるをえなかった。

その結果として我々が行き着いた一つの結論は、人的支援を効果的に実施するためには、その人材を体系的に育成することが肝要であるという、ごく当たり前のことであった。大学図書館の世界では、図書館員による情報リテラシー教育の実践は1980年代から始まっており、日本国内でも1990年代にはかなり議論が進んでいた。しかしながら、情報リテラシー教育という、教育という枠組みの中の課題でありながら、例えばインストラクショナル・デザインといった教育のために必要な技法への関心は比較的新しいものであった。このような状況の背景の一つは、日本の大学図書館のモデルがアメリカの

大学図書館であって、アメリカの大学図書館では図書館員が教育や学修に直接的にかかわるという伝統があることから、それをモデルとした日本の大学図書館が、大学図書館、あるいは大学図書館員は、そうあるべきだと考えたにちがいない。しかし具体的にどの様にふさわしい能力を身につけるか、あるいは人材を確保するかということになると、具体的な議論はあまりなかったと言えるのではないだろうか。

4. 教育・学修支援の実例から見えること

千葉大学ではSULA (Super University Learning Administrator) という教育・学修支援の専門職の設置を計画しており、2016年度に発足した国際教養学部においてまず2名を配置した。国際教養学部はリベラルアーツ教育を標榜する学部であり、この学部におけるSULAの支援活動の中心はアカデミック・アドヴァイジングになるだろう。いくつかの大学における教育・学修支援の実践事例を見てみると、その取り組みは多様である。千葉大学でも参考にした国際基督教大学のアカデミックプランニング・センターや、北海道大学ラーニングサポート室、関西大学や愛知みずほ大学の学修コンシェルジュなど、様々な名称で教育・学修支援の実践が行われつつある(白川, 2016)。

このように、教育・学修支援活動は、少なくとも現時点においては、それぞれが独立の取り組みとして実施されていて、その活動にふさわしい人材の育成が体系的になされているわけではなく、それぞれの大学において、オンザジョブ、あるいはある種の経験を基盤として自学自習が行われていると考えてよいように思われる。しかしながら、教育・学修支援の実践が既に一定程度広まっている状況を踏まえれば、これらの支援活動に共通する能力や専門性は一体何かという議論が必要であり、このスキル標準といったものを検討する必要があるのではないだろうか。

この検討において、教育・学修支援が行われる領域は相当広い点に留意した。千葉大学では、図書館機能をベースとして、それが教育・学修支援の文脈でどのように広がっていくかをまず考えたが、より俯瞰的に見れば、大学の職員が行っている学生に対する支援活動の範囲には、キャリア支援、教務、学生の海外派遣、海外からの学生の受け入れ、障害学生支援、学生生活支援、そして学修支援・学習相談といったことが含まれる。それぞれの活動は独自の特性を持っているが、重複している部分もあり、教育・学修支援の専門性を捉える際には、この重複している共通部分をどのように明らかにする

か、それをどのように育成できるかといったようなことを検討した。実践を行っている職員を見ても、図書館員、学務系、国際系など様々であり、職員のカテゴリーだけで分けることも不可能である点にも留意した。

5. 教育・学修支援の専門性に必要な能力項目とそれに基づく養成プログラム

このような現状認識を踏まえ、教育・学修支援の専門性に必要な能力項目を明らかにするために、文献調査、インタビュー調査及びアンケート調査を実施した。この調査は393件の文献調査、29名の職員へのインタビュー調査、712名から回答を得たアンケート調査によって構成される(岡田他, 2017)。その結果として、表1に示すように7領域を特定した。その一つは「基盤的スキル」であり、情報通信技術のスキル、語学力、説明力、俯瞰力、クリティカル・シンキング、文章作成能力などを含む、社会人として誰もが必要とされるスキルである。より専門的な領域は、「学生・学修支援への関心」「担当業務の遂行」「大学職員としての共通性」とカテゴリー化され、それぞれが「理解する内容」と「対人関係」でさらに細分化された6領域として説明された。

これを基礎に作成されたのが表2に示す「教育・学修支援の専門性に必要な能力ルーブリック(試案)」である。教育・学修支援の専門性に必要な6領域について、それぞれの領域に含まれるべき要素を具体的に示し、領域ごとにSからCまでの段階的能力を示すものとなって

いる。Sは「知識やスキルを発展させ指導することができる」レベルであり、段階的に下がっていった、Cは「知識として身につけている」レベルと規定されている。

このように専門性を理解し、この能力ルーブリックを踏まえて、実際にプログラムに落とし込んでいくことが次の課題であった。この能力ルーブリックの背景には25の項目と180の行動特性が存在している。これらを考慮しつつ、それぞれ4段階で記述される領域に即して各テーマの教育目標水準を設定し、プログラムを構成することにした。全体で15テーマが取り上げられ、各テーマ8時間、合計で120時間の体系的な教育プログラムが形成された。このプログラムにおいては、以下に挙げる11テーマを基礎的なものと位置づけている。

1. 高等教育政策と自校理解
2. カリキュラム理解
3. 学生の抱える困難の理解と支援
4. コミュニケーションとカウンセリングの基礎
5. 高等教育の国際化対応
6. 教育IR入門：教育データの分析と活用
7. 教材のICT化と教材開発支援
8. 学修支援とアカデミック・アドヴァイジング
9. 教育方法・教育評価
10. 学生・学修に対する理解
11. ラーニングコモンズの運営

表1 教育・学修支援の専門性に必要な能力項目(試案)

	学生・学修支援への関心	担当業務の遂行	大学職員としての共通性
理解する内容	①学生・学修・教育支援の内容 ・教育内容の把握 ・学生・学修・教育支援の設計と実施 ・学生・学修・教育支援活動のプログラム改善 ・学生・学生支援の現状理解	②担当業務の内容 ・課題の設定と問題解決 ・情報収集・整理・分析・発信 ・業務に関する知識 ・様々な経験とその活用	③大学についての知識 ・高等教育・社会・教育に関する知識 ・所属大学についての理解
対人関係	④学生への対応 ・学生対応への基本的姿勢・態度 ・留学生への対応 ・困難を抱えた学生への対応	⑤担当業務への取り組み方 ・担当業務の遂行 ・チームワーク	⑥人間関係の構築 ・人的ネットワーク ・教員との連携・協働
基盤的スキル			基盤的スキル ・キャリアアップ ・スキルアップの取り組み ・ICTスキル ・物事を広くみる力 ・語学 ・クリティカルシンキング ・説明できる力 ・文章作成能力 ・メタ的な能力(社会人としてのコンピテンシー)

表2 教育・学修支援の専門性に必要な能力マップ（試案）

領域	項目 (各領域で含む要素を具体的に示したもの)	S (知識やスキルを発展させ、指導することができ)	A (知識やスキルを実践の場の問題解決に応用できる)	B (身に付けた知識を説明できる)	C (知識として身に付けている)
①学生・学修・教育支援の内容	<ul style="list-style-type: none"> 教育内容の把握 学生・学修・教育支援の内容の設計と実施 学生・学修・教育支援活動のプログラム改善 学生・学修・教育支援の現状理解 	<p>学生の支援ニーズを調査し、学習者のニーズにあわせた学修支援を開発し、効果的に実施することができる。さまざまな教育領域の教育上の最新の改善課題、論点、教育方法を把握し、個別の授業ニーズにあわせて教育支援を活用することができる。そして、学修支援・教育支援の結果を検証し、評価、改善することができる。</p>	<p>個々の学生に応じた支援内容・方法を決定し、必要な支援を話し、提案することができる。また、所属大学全体の教育課程の概要を理解した上で、学内外の先進的な取組事例を参考に、個別の授業に対して教育支援を具体的に提案することができる。</p>	<p>学修支援に必要な教育領域における最新の改善課題、論点、教育方法を理解し、個々人の学習上の課題を踏まえた支援を説明することができる。</p>	<p>教育支援や学修支援の担当者に必要な法令遵守の意識、倫理観を身に付けている。また、学修支援に必要な教育課程の基本方針、組みと個々の授業が扱っている教育内容の概要を理解している。</p>
②担当業務の内容	<ul style="list-style-type: none"> 課題の設定と問題解決 情報収集・整理・分析・発信 業務に関する知識 様々な経験とその活用 	<p>所属箇所における課題を発見し、改善することを目的に、課題設定、データ収集・分析、対応策の立案、実施を自律的に実現することができる。担当業務に関連する新たな取組を企画立案し、周囲の協力を得て、実行することができる。</p>	<p>学内外の先進的な取組事例を参考にし、自分の担当業務に応用することができる。また、自分の業務に関連する情報、データを収集し、整理、分析した上で、業務上の課題について解決策や改善策を提案することができる。</p>	<p>学内外の最新動向・情報を収集し、担当業務との関連性を説明することができる。また、自分の業務について予算的裏付けや会計上の位置づけを説明することができる。これまでの業務内外の経験を現在の担当業務に活かしており、その関連性を説明することができる。</p>	<p>大学における担当業務を行うために必要な知識を有している。また、学生や教育に関する情報、整理、保管に関する法令や規則、倫理を理解している。</p>
③大学についての知識	<ul style="list-style-type: none"> 高等教育・社会・教育に関する知識 所属大学についての理解 	<p>高等教育の現状について批判的に分析・検討し、所属大学における教育のあり方について具体的な改善案を策定し、実践の場へ提案することができる。</p>	<p>高等教育を取り巻く社会・経済情勢や政策動向などから、所属大学の教育の現状について批判的に分析・検討し、組織上の構造的な問題特定し、解決策や改善策を提示することができる。</p>	<p>大学で教育研究されている学問領域全体の体系的な内容、構造についての理解に基づき、所属大学の教育の特徴や個々の施策・規則の意義や課題について説明することができる。</p>	<p>国内外の大学に関する歴史や制度、法規、政策、取り巻く環境などについて基本的な理解を示すとともに、その中で所属大学の理念や特色、位置づけを把握している。また、カリキュラム論や発達理論などの教育や学生に関わる一般的な知識を有している。</p>
④学生への対応	<ul style="list-style-type: none"> 学生対応への基本的姿勢・態度 留学生への対応 困難を抱えた学生への対応 	<p>学生の対応に関わる学内外の利用可能な資源の現状について批判的に分析・検討を行い、より効果的な支援の体制・あり方、実現可能性を含めて、企画・設計し、構築するなど、学生の対応について指導的役割を果たすことができる。</p>	<p>学生への対応に関して、国内外の様々な事例を参照・理解し、それらの事例を批判的に検討したうえで、個別の事例に適用して実践に利用することができる。問題解決のために、学内外の利用可能な資源を活用し、効果的に対応することができる。</p>	<p>アドバイジングやカウンセリング、コーチングに関する技術を活用し、留学生を含む多様な学生への効果的なコミュニケーションのあり方について説明することができる。また、所属大学における保護者との関わり方や医師・看護師等の学内外の利用可能な資源の現状について説明することができる。</p>	<p>現代の学生・若者をめぐる状況や課題を理解し、キャリアやハラスメントなど、学生が入学してから卒業するまでにどのような困難や課題を抱えるかについて理解している。また、問題行動を起こした学生への対応について把握している。発達障害やメンタルヘルスなどに関する困難を抱えた学生への対応や支援についての知識を有している。</p>
⑤担当業務への取り組み方	<ul style="list-style-type: none"> 担当業務の遂行 チームワーク 	<p>学内外の組織横断的な、あるいは関係ない担当業務について先を見通した計画を立て、主体的に実行することができる。さらに、協働して業務を行うことの強みを活かして、高い成果を生み出すことができる。</p>	<p>担当業務の意義や大学全体から見た役割を理解しており、職務に対して意図的に取り組むことができる。チームで業務を進めるにあたり、自分の考えを伝えつつ、他者との合意形成を図り、協働的に業務を推進することができる。</p>	<p>所属大学の方針や業務の流れを把握し、正確に業務を行うため、自分で調べたり、必要に応じて関係者に確認することの重要性を理解している。また業務で困難が生じた場合は、周りに助けを求めることができる。また、チームワークを意識して業務を遂行することができる。</p>	<p>所属大学の方針や業務の流れを把握し、正確に業務を行うため、自分で調べたり、必要に応じて関係者に確認することの重要性を理解している。また業務で困難が生じた場合は、周りに助けを求めることができる。また、チームワークを意識して業務を遂行することができる。</p>
⑥人間関係の構築	<ul style="list-style-type: none"> 人的ネットワーク 教員との連携・協働 	<p>勉強会・シンポジウム等の参加や情報交換の機会を利用し、学内外に幅広い人的ネットワークを形成している。また、学内外の人的ネットワークを活用し、様々な情報を収集し、所属大学の業務改善・開発に生かすことができる。</p>	<p>大学教員の仕事や役割についての理解に基づき、業務で関わる教員の特性を把握し、他箇所の職員等との連携を含めて、協働する体制を構築するための働き掛けを行うことができる。</p>	<p>担当業務以外の業務や学内の取り組みについて関わる機会に積極的に参加するなど、開かれた態度や行動を示す。</p>	<p>担当業務以外の業務や学内の取り組みについて関わる機会に積極的に参加するなど、開かれた態度や行動を示す。</p>

これらに加え、二つの総合的なテーマと二つの総括的なテーマが組み合わされる。また各テーマが能力ルーブリックとどのような関係にあるかというのを整理したカリキュラム・マップを作成し、ここに挙げられる各テーマが能力ルーブリックの各領域のどの水準と対応しているかを示している。

6. まとめにかえて

最後に、なぜこのような構想を練り、実際にプログラムをスタートさせるに至ったかを改めて述べておきたい。千葉大学においては、教育や学習の環境のあり方として、空間、コンテンツ及び人的支援という三つの要素が不可欠であり、この三つが有機的に結合することによってこれからの人材を育てていくことができると考えてきた。2011年に開始したアカデミック・リンクという概念がそれであり、この概念の下、教育・学習の質的向上を目指した支援活動を実施してきた。空間については、大学図書館の改修によって学生にとっても魅力的な空間が整備され、学生たちは活発にその場を利用している。それに加えて、様々なコンテンツが提供されるとともに教材作成支援といった従来の大学図書館の機能を越える活動も実践的に行い、学習のためのコンテンツの提供を積極的に行ってきた。人的支援については、モデルのない探索的な取り組みであったが、その経験からは、専門的職能を持っている人材による人的支援が不可欠になってきていると考えてきた。今日、教育・学修支援、学習環境整備は明らかに新しい段階に入ってきていると言えるだろう。

教育・学修を支える取り組みにおいては、個々の学生のニーズに対応する個別的な取り組みが必要になってきている。そのための人材の育成は、これまでは実践を通じた知識や技能の習得によってなされてきた。学生に関わる部署に偶然配置された職員が実践を重ねていくことを通じて、あるいは先輩からの指導を受けるなどして知識や技能の習得がなされてきた。しかし、教育、学修支援がこれからの大学教育における基盤的サービスであるという理解が進んでいくと、支援人材が備えるべき標準的スキルの理解とそれに基づく人材育成が不可欠になるはずである。

さらに次の段階に進むための課題が見えてくる。それはこのような人材を大学において専門職化していけるのかどうかということである。我々は専門職としての重要性を認識はしつつも、それが直ちに我が国において教

育・学修支援のための専門職制度を実現することになるとは必ずしも考えていない。しかし、今後さらに教育・学修支援活動が活発に行われるようになっていけば、いずれその職のあり方やキャリアパスを含む制度的な議論に進まざるをえなくなるのではないだろうか。個人的には、現状では緩やかな専門職あるいは緩やかな専門性、すなわち、制度としては確立していなくても、実際の職務を行う上でその業務を行う人に対して一定の専門性を認めるといった段階を経て、さらに実践を重ねていくことによって制度的な議論への準備ができていくのではないかと考えている。まずはこのような職能を持っている人材を送り出して、そのような人材が教育・学修支援の現場で活躍するようにしていくことが肝要であろう。

文献

- 中央教育審議会 (2008) 『学士課程教育の構築に向けて (答申)』 (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm) (2017年3月18日アクセス)
- 中央教育審議会 (2012) 『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて—生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ—(答申)』 (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm) (2017年3月18日アクセス)
- イノベーション・デザイン&テクノロジーズ株式会社 (2015) 『大学における専門的職員の活用実態把握に関する調査報告書』 (http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/itaku/_icsFiles/afieldfile/2016/06/02/1371456_01.pdf) (2017年3月18日アクセス)
- 岡田聡志・白川優治・米田奈穂・谷奈穂・御手洗明佳・多田伸生・奥田聡子・竹内比呂也 (2016) 「教育・学修支援に求められる大学職員の資質・能力と専門性に関する探索的研究」『大学教育学会誌』 38(2), 47-56.
- 篠田道夫 (2016) 「これからの大学改革の核, SD・職員力の飛躍」『リクルートカレッジマネジメント』 199, 44-48.
- 白川優治 (2016) 「教育・学修支援に必要な能力項目・能力ルーブリック (試案)」千葉大学アカデミック・リンク・センター編『新しい専門的大学職員に求められる教育・学修支援の専門職性とその養成』千葉大学アカデミック・リンク・センター, pp.8-16 (ALPSブックレット・シリーズ, Vol.2)